

村北遺跡 資料整理だより 第2号

今回のイッピン 小さな矢じり

発見された2点目の矢じり

どなたでも知っている「矢じり」。

その名前の通り、弓矢の「矢」の先端につけて、狩りに用いられた道具（石器）です。狩りをして暮らしていた縄文時代の遺跡からはたくさん出土します（図1）。

しかし、村北遺跡からはこれまで1点しか出土していませんでした。そのため、「なぜ矢じりが出土しないのか」、「何をするためにここに来たのだろうか」、ずっと私たちを悩ませてきました。

ところが、資料整理をすすめる中で、発掘調査時に回収した土を洗浄・選別したところ、2点目の矢じりが発見されました（写真1）。

今回は、この矢じりに注目して、縄文人たちが村北遺跡で何をしていたのか、少し考えてみたいと思います。

小さな矢じりの特徴

今回、新たに発見された矢じり①は、長さ1.3cm、幅1cm、厚さ2mm、重さ0.4gです。とても小さく軽いものです。これまで見つかった矢じり②もほぼ同じ大きさになります（図2）。

ともに、茎（なかご）と呼ばれる突起を持たない「無茎鏃（むけいぞく）」というタイプの矢じりです。このタイプは縄文時代後期頃までたくさん作られますが、その後は茎を持つ有茎鏃（ゆうけいぞく）に変わっていきます。

この矢じり①が発見された土は、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴建物を埋めた土を回収したもののなので、おそらく、村北遺跡のなかでも古い時代に使われていたと思われます。

矢じりの先端部分は、2点とも欠けています。このことから、これらの矢じりは狩りに使われたものであると考えられます。

小さく軽い特徴から、大型動物ではなく、小型動物・水鳥などを捕るために使われたのでしょうか。

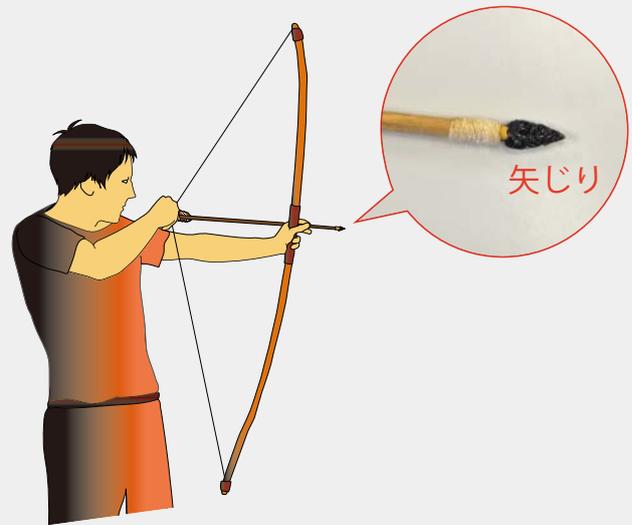


図1 矢をつがえる人（イメージ図）



写真1 新たに見つかった矢じり（矢じり①）



図2 矢じりの形と種類

